1 月 16 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　1：　14－20

「わたしについて来なさい」

イエスが洗礼を受けられることによって、神の救いの御業はいよいよこの世に露わになりました。その救いはヨルダン川周辺に留まることなく、広く世界へと広がっていきます。

神が人間を見捨てられることはない。たとえ自ら神から離れようとする者をも神は招き、立ち帰る道を備えてくださる。神の救いはその普遍性のゆえに、留まることがあってはならないのです。広がっていかねばならないのです。

神はもちろん、ご自身でその御業を成し遂げることができる方です。誰の助けを受けずとも、遍く救いを広めることができる方です。しかし、ここでも神は人を用いられます。神から直接、恵みを伝えられることは大変嬉しいことです。けれどもそれ以上に、人が受けるべき恵みは人を通して伝えられる方がより身近に、より具体性を伴って迫ってくるのではないでしょうか。それは神の救いが、人としてのイエスを通して伝えられることと相似形です。

だから、イエスは人を招かれるのです(「イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。」マルコによる福音書 1:17)。自らが神に託されて恵みを体現するのと同じように、あなたも恵みを共に伝えようと。

突然、招かれた側はどうだったでしょう。救いを目の当たりにした喜びもあったでしょうが、それ以上に不安もあったのではないでしょうか。一介の漁師に過ぎない自分に何を語ることができるだろう、そんな思いが首をもたげたとしても不思議ではありません(「わたしは言った。『ああ、わが主なる神よ／わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。』」エレミヤ書 1:6)。しかし、イエスの言葉はその不安を超えて心に飛び込んできます。エレミヤを支えた神の言葉のように(「しかし、主はわたしに言われた。『若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ／遣わそうとも、行って／わたしが命じることをすべて語れ。』」エレミヤ書 1:7)。「わたしについて来なさい」「わたしについて来さえすれば大丈夫だ」と。

また、もしかすると他者の目が気になったかもしれません。「たかが漁師が何を偉そうに語っているのか」と言われそうで、一歩を踏み出すことが怖くなったかもしれません。しかし、ここでもイエスの言葉が響きます。「大丈夫。わたしについて来なさい」と。神は、出自によって選び出される方ではありません。エレミヤも、パウロも、自由な神の選びの中にあります(「わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し／諸国民の預言者として立てた。」エレミヤ書 1:5、「すると、主は言われた。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。』」使徒言行録 9:15)。

神は今、「あなたを」選ばれます。「わたしについて来なさい」と。選ばれた者はただその事実を受け止め、その招きに応える、ただそれだけで良いのです。神の助けの中で、厳しい現実の荒波に向かって、喜び歌いながら前進して参りましょう(「喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。」詩編 100:2)。